「境界（地域、文化、世代、学校種）を越えた
海洋教育連携カリキュラム・デザイン」

課題別学習「海・Sea」

2018 年度 海洋教育パイオニアスクールプログラム

【地域展開部門　報告会】

東京大学教育学部附属中等教育学校

主催：東京大学教育学部附属中等教育学校
東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター
日本財団

協力：特定非営利活動法人珊瑚舎スコーレ（夜間中学校）
笹川平和財団海洋政策研究所

会場：東京大学本郷キャンパス 福武ホール

1 東京大学教育学部附属中等教育学校

生徒:後期課程 4 年生(男子 5 名、女子 6 名)
前期課程 3 年生(男子 4 名、女子 6 名) 合計 21 名

2 全体活動テーマ

「境界(地域、文化、世代、学校種)を越えた海洋教育連携カリキュラム・デザイン」

活動テーマ

課題別学習「海・Sea」

連携校:沖縄県珊瑚舎スコーレ(夜間中学校)

3 実践の概要・ねらい

東京と沖縄の・中・高校生が連携して、海を介して人を知り、人を学び、日常生活では体験できない(他の価値には置きかえることのできない)「学び」を教育学的観点より育む新たな海洋教育連携カリキュラム開発を目的とする。

この連携授業は、各学校が共に「海と人との共生」をキーワードに「海を学ぶ」東大附属が中心となり、沖縄で「海に学ぶ」沖縄本島の夜間中学の生徒(高齢者)と沖縄本島で交流会を開催し、お互いの学校や地域で行われている海に関する、また介した学校行事の取り組みや考えについて発表し、共に共有する。そして自分の生活環境と異なる地域の人の海に対する価値を自然、生活、文化、歴史、産業、経済等の様々な分野から、深い課題、深い関わり、深い理解をもって協働的に学び、海から地域愛を育てると共に子どもの生きる力を育むことをねらいとした。また交流会を通して自己を対象化させることにより、自己のあり方を見つめ直すきっかけとすることも狙いの一つである。

4 実践計画

① テーマ・概要・活動計画、教科等との関連

「海と人との関わり」について、資料、書物の読解(知識や理解の深化)、フィールドワーク(沖縄体験・交流)、対話(新たな価値の発見)、映画制作(創出と協働の学び)を行い、海との関わりの深さと豊かさを学ぶ。そして、連携校の沖縄の中学生と沖縄で交流会を行い、そこで培われた感性と新たな価値をもって生きる力を育むことを目的とする。以下がその目的である。

- 聞くことを中心としたコミュニケーションスキルを養う
- 自己を対象化させ、新たな価値を育む
- 他ともに互いの価値が異なることを共有し大切にする
- 他者を意識し、自分の言動に自覚的になる
- 自己の表現、探究からメッセージを自らの手法や言葉で発信する

【単元の指導計画】

授業構成を、①学び方を学ぶ、②実際に見て触れて学ぶ、③学びを深める、振り返りからつなげる、④新たな創造からの協働的な学び、とした。以下がその内容である。

(1)学び方を学ぶ

・日本の海と人との事情を知るために、全国の地域における海と人とのかかわりを「宗教、自然科学、歴史、言語、社会、他など」の9つの分野から「意味としての海」を考える。
・「海と人と社会」に関わりのあるインタビュー・テーマを主体的に決め、調べ学習を行う(海の役割、生きることと海、経済と海、海の生態系など、人と海との関わりについて、読み・書き・まとめる・発表する)。
・「海(Sea)」をテーマにパフォーマンスの身体表現・創作を行う。
・映像制作に必要な機材の扱い方、映像制作の知識やルールについて学ぶ。

(2)実際に見て触れて学ぶ

・東京と異なった地域社会に触れ、見て、聞いて、行動し、そして考える。
・沖縄本島の夜間中学生(高齢者)と地域の異なった様々な人々の海との関わりを探究する。
・現地にて島国の人々のさまざまな海との関わりを探求する。
・宮古島市立池間中学校の同世代の子どもたちと交流会を行い、現在の自分たちとの学校生活、日常生活について振り返る。
※沖縄県宮古島諸島、池間島の人たちへのインタビュー、記録としてのビデオ、写真の撮影・収録

○沖縄宿泊学習
(一日目)
・戦争追体験(糸数壕への入壕、・平和祈念資料館の見学)
・珊瑚舎スコ―レ(夜間中学)との交流会
4 月から 8 月までの実践発表および報告をお互いが行う。
(二日目)
・琉球大学博物館の見学(風樹館の学芸員による案内)
・うるま市勝連庁舎にて「あまわり浪漫の会」と交流会
※ 中学 3 年から高校 2 年生 168 名の演技鑑賞および共演
・宮古島に移動
(三日目)
・宮古島市立池間小中学校の生徒と交流会(海の散策、島の食材を使っての昼食づくり)
・池間島入村、民家さんとの交流会、民家家業の手伝い
・ドキュメンタリー映像制作のためのインタビュー(対話の実施)
・池間島泊
(四日目)
・池間島退村

(3)学びを深める、振り返りからつなげる

・体験から得た自身の価値に対する心の整理と創出を、活字、ことば、イラストから行う。

・これまでに記録した沖縄のメディアをもとにドキュメンタリー映画の構成を考える。

・映像記録の編集及び「海と人とのかかわり」」「聞くこと・語ること」「記憶を記録する」「対話する」をキーワードに一人 1 本のドキュメンタリー映画を制作する。

(4)新たな創造からの協働的な学び

・事後学習で仲間が制作したドキュメンタリー映画に対し、同様の問題意識(問い)をもった者同士が協働で第 2 作ドキュメンタリー映画の構成を考える。

・池間島の人にとっての海や海を介しての思いを対象化させ、そこから社会に向けて自分たとなりのメッセージを考える。

・第 2 作「海と人との関わりⅡ」と題し、ドキュメンタリー映画をグループで制作し一年間の成果物とする。

※ 2018 全国海洋教育サミット「ポスター発表」で発表を行う。

時	学習活動	指導上の留意点
1	オリエンテーション、授業説明、アイスブレイク	・授業の概要を説明。 ・生徒同士の関係構築のためのアイスブレイク。
2	「海と人との関わり」意味としての海について調べる①	・全国の「海と人とのかかわり」を探るために、各地方を10つのカテゴリーに分け、海と人とのかかわり事情を調べる。 ・図書館での情報収集。
3	「海と人との関わり」意味としての海について調べる②	・それぞれが調べたカテゴリーごとの情報を、3、4 年生混合グループに分かれ「日本の海と人とのかかわり」を意味としての海に掘り下げて考える。そして、そこで学習した内容を共有し、自分の設定テーマ、海と人との関わりから発展させたテーマに深める。 ・グループ(協働)から自分(個)のインタビュー課題テーマを設定し、5W1H に整理する。
4	コミュニケーション・ツールとしての表現(ダイナミック琉球)Ⅰ	・沖縄体験学習において沖縄の人々と関係を構築するためのきっかけの一つとして、パフォーマンス(を物語

		った歌とパフォーマンスを中心とした「ダイナミック琉球」）の練習。 ・仲間との関係性、異学年での取り組みからの創造を学び考える。
5	コミュニケーション・ツールとしての表現（ダイナミック琉球）Ⅱ	・個々の練習からパートごとのパフォーマンス（身体表現）練習。
6	コミュニケーション・ツールとしての表現（ダイナミック琉球）Ⅲ	・グループ（協働学習）から全体練習へと展開させたパフォーマンス（身体表現）の練習。
7	インタビュー対話 WS①	・インタビュー撮影の体験を通して、インタビューとは何かを考える。 ・はじめにカメラなしで「趣味について」のインタビューを行う。二回目にカメラを入れ、相手に聞きたいことをインタビューする。 ・単におしゃべりのように話を聞くのでもなく、答えを引き出そうとして聞くのでもなく、正面を向き合って話を聞く、すなわち＜対話＞することを目指す。
8	インタビュー対話 WS②：「＜聞く＞ということ」	・＜聞く＞ということをテーマに、前時に撮影したインタビュー映像を見返す。 ・教材に奈良女子大学附属中等教育学校の生徒作品（コンクール優秀作品）ドキュメンタリー映画を取り上げ、鑑賞した後で、グループごとに映画の感想をインタビュー撮影する。 ・自分が聞いた相手の感想をワークシートにまとめる。 ・人の話を聞くことの難しさ、大切さについて考える。
9	インタビュー対話 WS③：「＜撮る/撮られる＞ということ」	・＜撮る/撮られる＞ことをテーマに、前時に撮影した映像を見返す。 ・被写体の立場から書かれた資料や映像を通して、カメラの「暴力」と、そうであるからこそ有する可能性に

	沖縄体験学習の事前学習	ついて考える。 ・沖縄体験学習の準備。 各活動リーダー、挨拶担当者、民泊部屋割り、などを決める。
10	沖縄体験学習の準備	(4 年生のみの活動) ・ダイナミック琉球の練習 ・沖縄についての知識を深める。 ①沖縄のビデオを見る。 ②沖縄と海との関わりを考える。
11	夏休みの課題説明・沖縄体験学習準備	・沖縄体験学習の準備。 ・夏休みの課題の説明 沖縄でインタビューするテーマについて問いを深める。
12	沖縄体験学習準備/インタビュー対話撮影の練習	・テスト撮影の練習。 ・パフォーマンス(身体表現)の練習。 ・映画「ひめゆりの塔」の鑑賞。 ・時空間を越えた中で、現在の自身について考える。
13	沖縄体験学習準備/インタビュー対話撮影の練習	・「自分で立てたテーマについて語る」を対話的にインタビューを行う。
	沖縄体験学習(3 泊 4 日)	※上記、沖縄体験学習内容を参照
14	沖縄体験学習のまとめ 振り返りとしての「心の表出」	・体験学習のまとめとして、関係者へのお礼の手紙、撮影映像の鑑賞。 ・沖縄での体験を振り返り、心の中の整理と自己を表現するために、色や形の意味を考えて描写し、「心の表出」を行う。
15	心の表出、発表会	・沖縄で感じ考えたことを絵として表出し、一人一人が描いた絵の意味や、使った色の意味を発表する。
16	銀杏祭準備(開会式、展示物作成)	・開会式でこれまで行ってきた授業について発表するための準備。 ①パワーポイントの作成 ②表現「ダイナミック琉球」の練習。 ③授業内容のポスターの作成
	銀杏祭(開会式)	
	インタビュー映像作品「第一の対話・沖縄」の制作①	・沖縄で撮影したインタビュー映像(素

17		材)を見直し、対話した相手から「何を受けとったか」を考える。 ・素材の内容を書き出し、「自分が受け取ったもの」を表現するための構成を、対話ごとに抜き出し考える。
18	インタビュー映像作品「第一の対話・沖縄」の制作②	・構成を考えたのち、パソコンにて編集作業を行う。 ※全 5 分の映像として完成させる。
19	インタビュー映像作品「第一の対話・沖縄」の制作③	・パソコンにて編集作業を行う。 ・インタビュー映像作品の完成。 ・完成したドキュメンタリー映像の解説を書き、鑑賞冊子を作成。
20	インタビュー映像作品「第一の対話・沖縄」	・二本目に作る映像作品についての説明を行う。 ・ふたつめの作品制作3人からなる全7グループの決定。 ・3 名一組のグループに分かれ、それぞれのグループで 3 人の作品を見直す。
21	インタビュー映像作品「第一の対話・沖縄」	・自分たちで深めていきたい作品を選択する。・
22	テーマインタビューの見直し、生徒同士話し合い 問いの設定	・協働で制作する映像作品「もう一つの対話」(全 10 分)についての詳細説明。 ・グループごとに選択したインタビュー映像作品を見直したのち、各々の関心を共有する。
23	「もう一つの対話」のインタビュー制作	・グループで選択したドキュメンタリー映像を基に、一つの大きな「問い」を立てる。 ・立てた「問い」を深めるためにワークシートに自分たちの考えや意見をまとめる。
24	インタビュー映像作品「もう一つの対話」の制作①	・二つ目のインタビュー映像撮影について自分たちで考えた構成、思いや感想を共有する。 ・撮影した映像を見直し、素材の内容をワークシートに書き出す。

		・「自分たちが受け取ったもの」を表現するための構成を、何度も民家さんお映像を見返しながらグループで考える。
25	インタビュー映像作品「もう一つの対話」の制作②	・ワークシートを確認しながら、グループ内で「(問いの)前提」、「(もう一つの)問い」「メッセージの発信」を共有する。
	日本海洋教育サミット ポスター発表に参加	
26	インタビュー映像作品「もう一つの対話」の制作③	・役割分担を行い以下の作業を行う。 ①「前提」と「問い」の自分たちによるインタビュー撮影。 ②パソコンでの編集作業
27	インタビュー映像作品「もう一つの対話」の制作④	・「もう一つの対話」の映像を編集したのちに、グループで見直し、再編集点の検討を行う。終了後、「前提」と「問い」「メッセージの発信」の編集を行う。
28	インタビュー映像作品「もう一つの対話」の制作⑤	・全素材をつないだのちに、グループで見直し、細かい点を編集し直し、映像作品を完成する。 ・完成したドキュメンタリー映像の解説を各グループで書き、鑑賞冊子を作成する。
29	インタビュー映像作品「もう一つの対話」の鑑賞会	・「もう一つの対話」作品の上映。 ・各作品について感想を書く。 ・最も印象に残った作品を一つ選び、その理由を説明。 ・それぞれの感想を発表し合い、お互いの考えを共有する。
30	授業のまとめ 校内発表会、シンポジウムの準備	
31	校内 課題別学習発表会	
3 月 18 日 東京大学で成果報告会のシンポジウムを開催する		

（生徒の声を一部紹介）

1. この授業を通して「海と人との共生（ともに生きていこうとすること）」をどのように思いますか、または思いましたか。

海と人は昔からお互いを支え合い、助け合って共存してきた。それはいままでもこれからも変わらない事実であろう。海は人がいないと成り立っていけないように、人も海が常に身近に存在していることを前提に生きてきた。これは海が人にとってかけがえのない存在であり、人々の心を癒し、人と人とを繋ぎ、生きていく上でのかけがえのないものを海から得ているからである。このどこまでも広がる寛大な海に人々は様々な面で何度救われ、助けられてきたことであろうか。今回実際に沖縄に行ってみることで、実際に毎日海の近くですごし、海を仕事にしているような方の海に対する気持ちを聞き、改めて海の大切さ、寛大さ、人々と海との関わりを肌で感じることが出来た。東京に居るだけでは常に海に心を寄せ、海とふれあい、感じる機会は少ないかもしれない。しかし、私はこの机上ではできない体験をさせて頂いたからこそ、この経験を忘れず、伝えていくと共に、改めて海へと自分の関係を考え直し、これから先もずっとお世話になっていく海、共存していく海に感謝しながら生活していきたいと思う。沖縄に行くことで新たな関わりが増え、海に対して考え直せたことがこれからの人生において大きな財産になった。

私はこの授業を通して海と人とが共生することとは。私はこの口座を受けるまで、人が海のいいところを生かして生活することであると考えていた。つまり、人が一方的にそこに存在する海を利用することが人と海の共生だと考えていた。しかしながら、実際に沖縄に行き、人が一方的に海を利用するのではなく、海が人々の生活、気持ちに何かを与えていて、　人々もまた、海を守って行くために動いている様子を目にして、海と人との共生は人が海を道具としてではなく、生活の一部として、1 つの形容しがたい大切な存在としてとらえて初めて実現されるものであるのだと感じた。私は池間の方々の生活の様子を見て、あれはまさしく海と人との共生であったと感じた。逆にとらえると、それまで私が考えていた海と人との共生は、真に海と人との共生とは言えないのだと感じた。では、そこにあった違いとはなんだったのか。それが、人が海に対して抱いている感情であった。これは東京の人たちが海を大切にしようとしていないから池間の方々が海を大切にしようとしているように感じた訳ではなく、東京の人たちが思っている以上に池間の方々と海は言葉に表せない特別な関係にあり、それが私には海と人との共生であるように見えた。

海と共生して生きるとはどのようなことなのだろうか。海の近くで暮らす。そんな簡単なことではないだろう。
私は今まで、海と人との共生がどんなものなのか。どんなものであるべきなのか。考えたこともなかった。しかし、この課題別学習での授業を受ける中で、海と人との共生を言葉ではなく、実体験として感じ、どれだけ素晴らしいものであるかを知ることができた。

海と共生していくこと。それは海に囲まれる日本だからこそできるものであり、大切にするべき伝統の１つであると思う

２．「海と人との共生」にはどのようなことが必要だと思いますか？

海と人との共存において欠かせないものは愛である。私は今回実際に沖縄に行ってみて改めてそれを深く見で感じた。人は海に対して愛を持って接して行かなくては海は永遠に存在するものではなくなってしまうだろう。また、海と共存していく上で様々な恩恵を受けてはいるが、その反面自然災害が起こったり、人の行動によって海の生態系が崩れたり、海が汚れたりしているのが現状である。共存していくということは、互いが互いを助け合い、助けられていくという事だ。これは海が人を昔から支えてきたように、人も海のことを考え、大切にしていかなくてはならない。これは愛ではないだろうか。海の近くに住み、海を常に肌で感じている人だけが海を大切にすれば良い訳では無い。全世界どこにいる人でも、海の存在を改めて考え、大切に愛を注ぐ必要があるのである。また、海は自然である。海は変えようとしても何も変わらない。そしたら人が海に寄り添い、よりよく変えていくしかないのでは無いだろうか。私はやはり共存していく上で、最も大切なことは、人が海に対して愛を注ぐことである。

当たり前のようだが、海が近いことが必要だとおもった。近いと言うのは、距離としてももちろんあるが、存在としての海の近さという面が大切であるとおもった。私は上にものべたように、池間で実際に民家の方々と生活をしてみて真の海と人との共生を知り、そこで始めに思ったことは、やはり距離として海が近い地域では、海が生活の一部として在るのがあまり前であり、自然に海と人との共生が自然に実現されているのであると感じた。しかし、私は海洋サミットに参加して、私は、その人にとっての海という存在の近さも海と人との共生には必要であると感じた。逆にいうと、海との距離が遠くても、海を自分にとって身近な存在としてとらえられていれば海と人とは教室することができるのではないかと考えた。

海と人との共生をしていく中で大切なこと。それにはどんな状況であろうとどんな場所であろうと、たった一つの共通点が存在する。
それは、まず一番に海のことを考え、海を大切に思い生きていくことだ。自分たちの利益を優先するのではなく、一番に海を考えるのだ。こんな姿は海を近くに感じない私たちには到底想像することができないものであり、理解しがたいものである。
私たちは、沖縄に行く前、事実としての海として、日本を囲む海についてたくさんの面から調べ学習を進めた。その中で、私が一番海と人との共生を感じたことを例に挙げる。
私は今まで海女といえば、海の幸が豊富な時は毎日潜り、海産物を取っていると思っていた。実際、私のように思っている人が大半であろう。しかし、そうではなかったのだ。海女は自分たちの利益を考える前にまず毎朝、海と会話をする。その日その日の海の顔色に合わせ、取る量を制

限していたのだ。このような姿はまさに海と人との共生と言えるものだろう。
しかし、決して海の近くで住んでいる人だけが共生できるということでないと思う。私は海洋研究サミットに参加したときにそれを強く感じた。海の近くに住んでいない私たちも海へたくさんの影響を与えている。ゴミやプラスチックで海を汚していたり、大気汚染による地球温暖化だ。そんな環境問題に向き合うのも１つの共生の仕方だと私は思う。

３．夜間中学校との交流会、授業サポートをしての感想を書いてください。

私は夜間中学校に行ってみて、まず感じたことは驚きだった。事前から先生には、夜間中学校の生徒の方の話や夜間中学校というものの存在を聞いてはいた。しかし、心のどこかでそれを実際には信じきれていない自分がいたのかもしれない。自分にとって勉強できる環境が当たり前で、文字をかけるのも当たり前で、日本の中に文字が書けない人や、勉強をしてこられなかった人がいるとは思わなかった。しかし、実際に夜間中学校で自分が先生として、自分たちよりも遥か人生経験の多い方との交流で、自分達の環境の有り難さ、恵まれていることを改めて実感できた。また夜間中学校方のお話もとても貴重なものとなった。私たちが毎日学校に通い授業を受け入れていること、そして先生がいて、たくさんの生徒がいるクラスがあり、自分の進みたい道に進んでいけること。当たり前だと思っていたことがとてもありがたいことだったということに気付かされ、私はこの体験を通して、とても大きなものを得ることができた。この大切な事に気付かせてくれた夜間中学校の方、この自分の環境にとても感謝したい。私はこれからもまだまだたくさんのことを学んでいくであろう。その時に必ずこの気づけたことを忘れずに、ありがたく学んでいきたいと思う。

私は、今回夜間中学の方々の授業サポートに入って今を生きる私達と戦争を知っている方々とでは、海に対して持っている感情が大きく異なることを知り、それほどまでに戦争というものは悲惨なものであったのだとしった。夜間中学の方々と海に関して、私達が行った活動と夜間中学の方々が行ってきたことをお互いに発表したときに、涙をこぼす生徒の方を目にして、私達にとっては日常的にみて正のイメージが強い海が、ここまで負のイメージになってしまうものなのだと知り、驚くとともにつくづく戦争の悲惨さを思い知った。戦争の体験者が減り、戦争の悲惨さを後世に伝えることが難しいと最近よく言われるが、今も昔も変わらない海という１つの不変的な存在の違いから戦争の悲惨さを学ぶということは、ただ体験を聞くよりも戦争という存在について自分の中で認識を深められたように感じ、戦争を後世につたえるという面で不変的な存在の見方から感じることはとても有効であるとかんじた。このように感じる事ができたことも、夜間中学の方々がありのままのことを私達に伝えて下さったためであると思い、夜間中学の方々に心から感謝している。

沖縄で行った夜間中学では、いつもと違い、教える立場に立つという体験をさせていただいた。しかし、そこで学ばせてもらったのは私たちの方であった。
当たり前のように学校に通い、机に向かい、学べると言うことがどれだけ幸せなことであるのだろうか。学びたい。という強い意欲、これからの未来に向かって強く生きていくという気持ち、過去の辛さをバネに努力を続ける力。いくまでは想像もつかないほどの強い思いが溢れていた。私は、あの震える手で鉛筆を握り、メガネをかけ、杖をつきながらも、机に向かう姿を忘れることはできない。たくさんの苦労を乗り越え生きてきた背中。そんな小さい背中が私にはとても大きく見えた。私たちは、そんな背中からたくさんのことを学ばせていただいたのだ。言葉で教わったのではない。姿から強く訴えかけられたのだ。こんな学びをすることは滅多にできるものではないだろう。
私は夜間中学の生徒さんたちが呼んでくれた海ノートのことを鮮明に覚えている。
「海ノートがようやく書けるようになった。」
「書いていると涙が自然に溢れ出てきてしまう。」
そんな言葉は、どれだけ戦争という存在がたくさんの苦痛を与えてきたか、海という存在がどれだけ大きく人の人生に結びついているのかを私たちに訴えかけるものだった。
それは、昔からいつどこでも、途絶えることなく、海と人との共生は続いてきていることを私に改めて感じさせてくれるものでもあった。その時、私はこの課題別学習という授業を通して、どれだけ深く大きな学びを得ようとしているのかを嬉しく思うと同時に、安易にわかったかのように考えてはいけないものだと思った。
たくさんのお話を話していただき、たくさん笑い、流れていく時間を大切に一緒に過ごす。
私たちはこんな素晴らしい時間の中で、私はたくさんの発見とたくさんの驚き、自分たちのいる今がどれだけ幸せな日々なのかを感じることができた。

４．今回、課題別学習「海・Sea」の授業を終えて得たものはどのようなことですか。

私は今回この課題別を通して多くのことを学びました。この課題別では、東京ではわからないことがたくさんあるということや、映像はいとも簡単に人の意見をいいようにも悪いようにも変えることができ暴力にもなるということ、ダイナミック琉球という踊りを通してのコミュニケーションツールも存在するということ、そして、自分の知らないところで、頑張っている人がいて、夢に向かっている人がいるということ。この課題別では、様々な方との交流などが多く、それぞれの相手や状況に応じた相手との接し方、口調、内容おっ一つ一つ考えなくてはならないということをとても実感した。ドキュメンタリー映画の作成においても、ひとつひとつの言葉を吟味し、深く考えたからこそ自分の伝えたいこと、相手の伝えたいことをより深く理解できたのだと思う。沖縄での生活も、たった 4 日間という短い間だったが、自分の人生においてとても大きなものを得ることができた。それは様々な方々との交流を通して、自分が気付かされたこと、学べたことが多かったからである。私はこの机上では出来ない貴重な体験を忘れることなく、沖縄で、出会った方々の思いやその時に抱いた感情を胸にこれからも努力していきたいと感じた。この課別を通して多くの方に出会えたことにとても嬉しく思う。

私は今回の課題別学習を通して、発信する力を得たと感じている。それは、自分の意見の発信、伝えたいことの発信、海の講座に関わって下さった方々の思いの発信、など１つ１つの伝えたいことを汲み取り、自分の言葉とし表現する力がこの一年間の様々な経験を通して身に付いたと思っている。それは、様々な場での発表や班での制作活動の中で、自分の意見をつたえる中で培われた力であると思った。また、その力に加えて人の考えを汲み取る力も得ることができたと思う。インタビューの編集の際に、何が民家の方々の伝えたいことであったのか、他の班や他のメンバーの意見を取り入れることができるのか、そのようなことを考えて行動するうちに、自然とその力を得ることができた。

この課題別を終えて得たこと。それは大きく分けて３つある。
１つ目は海という大きな存在がどれだけ多くの人に幸せを与えるとともに、辛い壁を与えてきたのかということだ。それは戦争時代から今も変わらないだろう。
海の事実を調べた調べ学習や、実際に足を運んだ沖縄での体験では、常に海が人と結びついていた。戦争という辛い過去を語るにも、これからの未来、どのようになっていくのかという期待を語るにも、楽しかった思い出や苦しかった思い出を語るにも、全てに海が寄り添っていた。
私が実際にインタビューしたおじいが言っていた言葉がある。
「海がなかったら自分が今まで経験してきた人生や、悔しい嬉しいなど思った日々をかたることはできないだろうね。僕たちには海が全てだし、全てが海とともにあるからさ。」
この言葉は、海がどれだけ大きな存在であるかを最大限に表している。
２つ目は海とともに生きていく人たちには、海に対する強い思いがあり、そんな強い思いが今の日本の海を作り、私たちを支えてくれているということだ。今の私たちが当たり前のように食べる海産物は、海に囲まれて生活し、海を第一に考えてくれるたくさんの人の贈り物である。
災害などから決して離れられない海。しかし、どんなことがあってもまた海の近くに戻ってくる。これが海と共生して生きていく沖縄の人々の言葉だ。 そんな海に対する強い思いが、今の海を作り上げてきたことはいうまでもないだろう。
３つ目は、映像の編集次第でいくらでもその人の意見を変えることができてしまうということだ。私は、実際にドキュメンタリー映画を作成した後から、ニュースなどで 2、3 人のインタビューを流れているのを見ると、自然にこれは本当に国民が訴えている意見なのかと考えるようになっている。たった 2、3 人が述べたことを編集を使い、意見を揃え、国民の訴えのように述べているように感じてしまうのだ。
この考えは、実際におじいにインタビューし、ドキュメンタリー映画を作成したからこそ得たものであり、私の中で大切にしたい考えでもある。

５．一年間を振り返っての感想

この 1 年間を通して、私は様々な方と対話した。もちろん、沖縄の方ともそうだが、同じ課題別の生徒ともたくさんの対話をしてきた。そうする様々な面で異なる考え方が見えてくる。沖縄

でのインタビューに向けた練習の中でも自分と全く違った意見でとても興味深かった。また、自分で実際に映像を作ることで映像の暴力というものを身にしみて体験した気がする。自分の観点で編集するといくらで相手の意見を変えられるし、独自のものにできるという事だ。今回映像を作る際、私は相手がどのようなことを伝えようとしているのか、何を伝えたくて、何がたまたまロから出た言葉かとても考え意識するようになった。また、さまざまな立場の方との交流を通して自分のあり方や、対話することの便利さ難しさを知った。この課題別を受講することで普段あまり意識しない、対話や映像の力、さまざまな場所で生活している方々のことを１年間常に考え意識してきたように思う。この経験はとても大切なものになった。これから先、対話や映像など気づかないところで自分がどのような影響力を持っているのか、常に意識しながら生活していきたい。

この課題別を通して、私が一番よかったと感じたのは、実際に現地に赴いて活動できたことであると思う。やはり、東京で先行研究を行って知った海とはまったくちがう海という存在が沖縄にはあり、さらに池間の方々にインタビューを行ったことによってその沖縄とはさらに違う海を体感できた。普段私達の学校では、よく調べ学習を行うが、そこには実際の体験や経験、感じ取ったもの等が存在しないことの方が多い。しかしながら、今回の学習では、それが逆で、自分自身が感じ取ったもの、感じ取ったことが中心となって、同じインタビューからもまったく違った作品ができた。調べて行く過程にもまとめにも、私の体験、考えが反映される。その部分で私はこの講座の面白さを感じ、同時に難しさも感じた。個人の考え方１つでインタビューや体験を生かすことも殺すこともできてしまうからだ。この学習で、培った経験はそこで培われた力とともに将来の私にとって大きな経験であったとおもった。

一年を振り返ると、まず一番に頭に浮かぶのは、たくさんの人との出会いである。全ての出会いにはじめての発見があり、私に取って忘れることのできない大きな学びになった。そんな学びは、今後の私の人生において、大きな存在となり、宝物となるだろう。
人と人との関わりがどれだけ強く心を結び、多くの学びをさせてくれるものなのか。全てに感謝し、過ぎていく時間を笑い、過去の出来事をありのままに未来へつなぐ。これらがどれだけ大切なことなのか。
国と国、人と人、過去と未来をつなぐあの大きな海がどれだけ多くの人を幸せにするのか、それとともに、暗い歴史を築いてきたのか。
人と海の共生。意味としての海というテーマをかかげ学んできたこの一年間は、机上では学べない素晴らしいものであり、最高の発見と体験をさせてくれる学びができるものだった。

② 実践の評価について

「よりよく問題を解決する資質や能力」、「学び方やものの考え方」、「主体的、創造的、協働的に取り組む態度」及び「自己の在り方、生き方」等について、授業内で行ったワークシート（ウェビングシート、問いから課題への発展シート、インタビューシート、映画制作ワークシート、他など）、心の表出作品、さまざまな体験学習のまとめの感想、身体表現「ダイナミック琉球」、ドキュメンタリー映画制作過程および完成作品、授業の振り返りから、次にあげる評価基準と照らしあわせて、その実現状況を評価した。

関心	興味・関心	・学習に対して積極的に取り組めている
		・自分が成長していくために必要な学習と意識がもてている
		・自分の興味や関心がもてている
意欲	実行力・積極性・創造性	・主体的に意識をもって学習を進めようと心掛けている
		・苦手（消極的）な学習にも粘り強く取り組めている
		・問題点を整理し、修正を加えながら取り組めている
		・誤りや失敗があっても根気強く取り組めている
関係・態度	指導力・コミュニケーション・協調性・社会性・達成感	・学習の際、他者（班内の友人等）との協力・協働ができている
		・自分の役割をしっかり果たしている
		・相手の立場になって行動できている
		・自分の学習の支援者に感謝できている
		・学習を終えて充実感（達成感）を得られている
思考	課題設定力・企画力・課題解決力	・学習（課題）の目的を理解している
		・ 自分の周りや体験から学習したい課題設定ができる
判断	情報活用力・価値判断力・評価活用力・相互評価力・自己評価力	・ 収集した情報を適切に選択し、分析することができる
		・得られた知識・経験・技能を生かせる
		・生徒間の意見交換や相互評価に積極的に取り組んでいる
		・学習を通してさらに調べてみたい新たな課題が見つけられる
		・相互評価を通じて自分の学習のあり方を深く考えられる
		・他者評価を通じて自分の学習のあり方を深く考えられる
自己表現	整理力・発表力・討論力・独創性	・学習のプロセスを整理して、筋道を立ててまとめられる
		・必要に応じて機器等を使い、適切に発表することができる
		・話し合いに積極的に関わり、自分の考えを適切に述べられる
		・自分なりの意見や主張をまとめることができる
		・他者にわかりやすく伝えることができる
知識・理解	知識の獲得・理解の深化	・学習の目的について理解を深めることができる
		・必要な機器についての扱い方が適切にできる

		・教材の意味を理解し、創造的に知識を広げられる
生きる力	自分の生き方を考える態度	・学習を振り返り、自分に自信がもてている
		・学習を通してこれからの自分について考えられる
		・自己実現への努力をしようと考えられる

5 今年度の実践

① 計画からの追加・変更点は特になし、計画通りに実施した。

② 実践の成果

・海洋教育に教育学的観点から捉えた社会に生きる学習として、次期学習指導要領改訂に向けた探究的学習とディープアクティブラーニングの可能性を示唆した。

・学校教育における人間形成を担う海洋教育カリキュラムとして、東京大学福武ホールにて地域連携部門採択3校で全国の教育関係者を対象にシンポジウムを開催した。

・大学研究機関（東京大学）と学校教育との連携のあり方について、一つのモデルとして発信した。

＜今後に向けて＞

・海を介した分野に対し、得た知識や情報から創造的に推論し、それを実際に確かめ深め、深い学びの場を設定することにより、新たな授業方法のカリキュラム開発が期待できる。また、公開研究会やシンポジウムでの発信から、新たな海洋教育として発展させることが可能である。

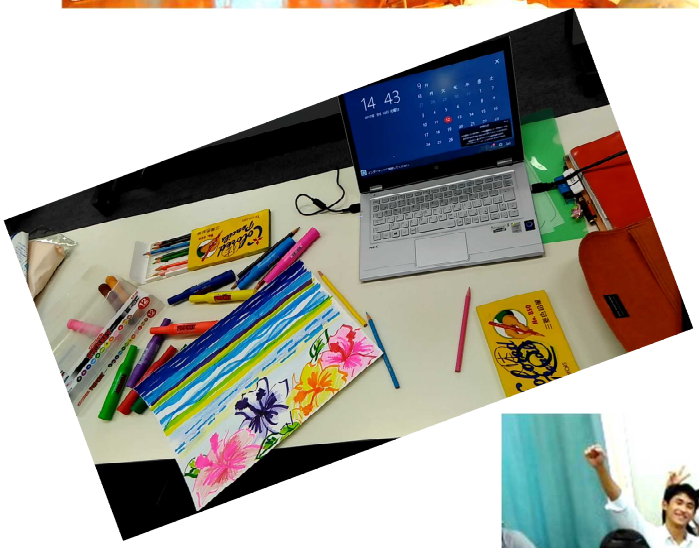
・地域、文化、多様な学校種間を越え、新たな海洋教育連携モデルとして発信することが可能である。

6 主な連携機関及び内容

連携実施機関：東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター

※2019 年 3 月 17 日にシンポジウムを同海洋教育センター、日本財団と共催で開催する。その際、沖縄の連携校も参加し合同の成果報告会とする。

※2016 年度（4 年継続）から本講座は、文科省研究開発事業の研究指定教科「探究的市民科」となっている。


14 43

「海と人とのかかわりを探る」
課題別学習「海・Sea」

境界（地域、文化、世代、学校種）を越えた
海洋教育連携カリキュラム・デザイン

〇総合的な学習の時間
〇対象学年：前期課程３年（中学３年に相当）、後期課程４年生（高校１年に相当）　２１名

【ねらい】
〇島国である日本の海事情をさまざまな分野（自然、生活、文化など）から、知り、感じ、考え、海そのものを包括　的に主体性　をもって学ぶ。
〇自分の生活している環境と異なった地域社会について、対話（インタビュー撮影）を軸に、さまざまな分野（自然、生活、文化　など）　から思考　活動や身体表現を探究的に学び、新たな価値を育む。

【地域展開部門のねらい】
東京と沖縄の中・高校生が連携して、海を介して人を知り、人を学び、自分たちの日常生活にない連携校の「学び」を共有する。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
創出・表現	インプット	授業のねらい									アウトプット	
探究活動	前期	「ことば」「情報」「論理」「関係」「身体・表現」									後期	
学びの方向性	・調べ学習（資料集の作成） ・カメラワーク ・インタビューの練習 ・交流会のための準備 ・映画構成の検討 ・ダイナミック琉球の練習。			沖縄体験学習			・心の表出と整理 ・映画構成の再検討 ・映画制作 （見えるものと見えないもの ・上映会（発表、鑑賞会） ・フォーラム発表					もう一つの対話
	学び方を学ぶ			学ぶ							振り返る・深める・つなげる	

どのように学んだか

総合的な学習

「海と人とのかかわり」について、
- 資料、書物の読解（知識や理解の深化）
- フィールドワーク（沖縄での体験・交流）
- 対話（インタビューの実施、新たな価値の発見）
- ドキュメンタリー映画の制作（創出と協働の学び）

海と人とのつながりの深さと豊かさを受け取った。

そして、つなげる

①聞くことを中心にコミュニケーションの力を培う。
②新たな価値を育む。
③自他ともに互いの価値が異なることを共有し大切にする。
④他者を意識し、自分の言動に自覚的になる。
⑤自己の表現、探求からメッセージを発信する。

地域展開部門

宮古（池間）
沖縄（那覇）
東京

成果報告書３　地域展開部門

テーマ：対話と協働を通して、海洋教育の可能性を探る

【概要】
＜海と人とのかかわり＞をキーワードに、「海を学ぶ」東大附属学校が中心となり、「海に学ぶ」沖縄本島の珊瑚舎スコーレ・夜間中学校の生徒(高齢者)とともに課題を共有しながら協働的に学びを進めてきました。本イベントでは。異なる地域､異なる世代の人々が対話を重ねることを通して、より深くから主体性を獲得していった実践の報告と、協働してつむいできた学びの成果を報告いたします。また、高校世界史での海洋教育の実践報告もいたします。本イベントを通して、ディープ・アクティブラーニング型の学習を取り入れた新たな海洋教育の可能性を拓きます。

【主幹校の概要】
東京大学教育学部附属中等教育学校
探究的市民科(総合的な学習)「課題別学習(海・Sea)」「海と人とのかかわり」をテーマとし､対話・思考・探究を軸に学びを進めています。沖縄の宮古島・池間島の方との対話を映像編集することで､自身を対象化し新たな自分と向き合いながら答えのない問いに挑戦しています。

【メンバー校の概要】
〇珊瑚舎スコーレ・夜間中学校
生徒の平均年齢は約 78 歳です。沖縄戦の混乱と貧困の中で就学機会を逃した方々が主に学んでいます。「海を学ぶ」ことを通して､負のイメージとして広がっていた海が「感謝と祈りの海」へ変貌していく。「学校で学ぶ」ことの本質が見えてきます。

【目次】
13:00-13:10　主催者挨拶
13:10-13:40　実践発表①
　東大附属高校「世界史Ｂ」南津武蔵・生徒
13:40-13:50　連携概要説明
　海洋教育パイオニアスクールプログラム・地域展開部門
13:50-14:20　実践発表②
　珊瑚舎スコーレ夜間中学校　星野人史・生徒
14:30-15:25　実践発表③
　東大附属探究的市民科　福島昌子・生徒
15:35-16:20　パネルディスカッション
　司会：小玉重夫(教育学研究科長)パネラー：実践者・生徒
16:20-16:30　講評・閉会挨拶
　田中智志(教育学研究科教授／海洋教育センター長)

（注）同シンポジウムでは、単元開発部門採択「世界史 B」もともに報告を行った。